

《書評》

중세한국어 감동법 연구
— ‘개달음’ 과 ‘복수성’ —

河崎啓剛・著

今回、書評の対象にしたのは、ソウル大学校大学院国語国文学科国語学専攻博士課程に2016年2月に提出された博士学位論文である。その題名を日本語に訳せば、『中世韓国語感動法研究—‘気づき’と‘複数性’—』となる。

この学位論文は、その題目の通り、中期朝鮮語において、「感動法」を表す形態素（先語末語尾）として扱われてきた「-ㅁ-/ㅁ-」を中心にした諸問題を、中期朝鮮語のハングル資料、及び音読口訣資料に立脚して論じたものであるが、中期朝鮮語の文法研究に貢献する主な論点は、以下の3つである。

第1に、従来1つの「感動法」という意味を表すものとされてきた諸形態素の中には、その実「感動法」ばかりではなく、主語が複数であることを随意的に表す「複数標識(plural marker)」の「-ㅁ-/ㅁ-」が存在することを明らかにしている。

それまでの研究に関して、中期朝鮮語の「感動法」を表す諸形態に関しては、高永根(1980)が、「-ㅁ-/ㅁ-」系列と、「-ㅁ-」系列に整理した後、圧倒的に用例数の多い「-ㅁ-/ㅁ-」についての論議が優先された結果、まれに現れる「-ㅁ-」固有の意味についての関心が不足していたと著者は指摘する。

そこで、15, 16世紀のハングル資料において、「-ㅁ-」が含まれた「語尾構造体」として、「疑問形」の「-ㅁ다」, 「命令形」の「-ㅁ라」, 「一人称」の先語末語尾「-ㅁ-」が後続する形式である「-ㅁ라」, 「-ㅁ이다」, 「-ㅁ니」, 「請誘法」の「-ㅁ라」に関して、中期朝鮮語のハングル資料、及び音読口訣資料を調査し、そのすべての場合において、「感動法」を表さず、主語が複数であることを確認している。

著者は、現代朝鮮語において、主語の複数性を動詞句内において随意的に表現しうる「-ㅁ浮動(floating)現象」が発達していると指摘している（例：무엇을 보고 들었느냐?）。そして、動詞句内において主語の複数性を随意的に表現する要素の存在は、現代朝鮮語、中期朝鮮語を問わず、なじみが薄いものでないと論じている。

さて、これで、「-ㅁ-」系列が「感動法」から除外されることになったが、「-ㅁ-/ㅁ-」系列はすべて「感動法」となるのかということ、すべてがそうではなく、「-ㅁ-」の後ろに「一人称」の先語末語尾の「-ㅁ-」が後続する場合はすべて、主語が複数であることを随意的に表すとしている。

具体的な形態素としては、「-더-」と結びついた「-다소-」, 「-ㄴ-」と結びついた「-노소-」, 「-거-/아-」と結びついた「-과소-/아소-」に関して, 中期朝鮮語のハングル資料, 及び音読口訣資料を調査し, 主語が複数であることを表すことを確認している。

よって, 従来1つの「感動法」とされてきた「-오-」には, 機能が全く異なる2つのものがあり, 先語末語尾「-오-」が後続するかどうかという明らかな統辞的条件によって相補分布をなしているとしている。そして, 1つは1人称の「-오-」が後続しない「感動法」の「-오¹-」である, もう1つは1人称の「-오-」が後続する「複数標識」の「-오²-」として区別できると論じている。

この結果, 「複数標識」と「感動法」の先語末語尾が, 中期朝鮮語の「時制体系」の先語末語尾{- ϕ -, -ㄴ-, -더-, -거-/아-} (-거-/아-を「時制体系」に含める議論については後述) とどのように組み合わせるかについて, 以下のように整理している。

「複数標識」の「-ㅓ-/오²-」

	- ϕ -	-ㄴ-	-더-	-거-/아-
1人称複数	-소-	-노소-	-다소-	-과소-/아소-
2人称複数疑問	-스다	-ㄴ스다	—	—
2人称複数命令	—	—	—	거스라/아스라

「感動法」の「-ㅍ-/오¹-」

		- ϕ -	-ㄴ-	-더-	-거-/아-
感動法	平称	-ㅍ-	-ㅍ-	-닷-	(後述)
	尊称	-ㅍ>시ㅍ	-시ㅍ-	-ㅍ>시ㅍ-	

ここで, 「複数標識」の「-ㅓ-」と「-오²-」が, 先語末語尾- ϕ -に後続する場合とそれ以外の先語末語尾に後続する場合で相補分布をなしているので, 「-ㅓ-/오²-」は1つの形態素の異形態の関係にあり, 同様に, 「感動法」の「-ㅍ-」と「-오¹-」も先語末語尾- ϕ -に後続する場合とそれ以外の先語末語尾に後続する場合で相補分布をなしているので, 「-ㅍ-/오¹-」は1つの形態素の異形態の関係にあると指摘している。

以上のように, 本論文の第1の論点は, 従来「感動法」として一括して扱われてきた形態素を, 本来の「感動法」に属するものと, それとはまったく異なった「複数標識」の意味を持つものに分類することに成功したところにあり, 新しい知見をもたらしていると言えよう。

第2に、「感動法」として取り出された、「-ㅁ-/-ㅁ¹-」の意味・機能に関する本格的な考察を行っている。

従来、この「感動法」に対応する現代朝鮮語の「終結語尾」として、「-구나/-는구나」が考えられてきたが、著者は、そのような解釈の問題点として、以下のものをあげる。

- a. 「終結語尾」の「-ㅁ다」や「-ㅁ다」などは、各々、現代朝鮮語で「-구나」, 「-는구나」に翻訳すれば、大体解釈できる。しかし、「-도소나」, 「-노소나」のように、「連結語尾」の「-나」が後続する場合も非常に多く、このような場合に「-ㅁ-/-ㅁ¹-」はどのように解釈するべきか。
- b. 「알리로소녀?」, 「어더키도소노?」, 「엇데 올리리똥던고?」のように、疑問文にも「-ㅁ-/-ㅁ¹-」が使用されるが、これを単純に「感嘆」や「感動」という説明をしてよいのか。
- c. 「時制標識」の「-더-」と「-ㅁ-/-ㅁ¹-」の結合順序に関して、この順序で結合した「-ㅁ다」が存在する一方で、結合順序が入れ替わった「-ㅁ더라」が存在する。「様態標識(modality marker)」の一種として認識されている「-ㅁ-/-ㅁ¹-」であるが、様態標識が時制標識の前に来ることは類型論的にも非常に異常なことである。
- d. 中期朝鮮語における「感動法」の「-ㅁ-/-ㅁ¹-」は、現代朝鮮語における「-구나/-는구나」よりもはるかに頻繁に出現し、一般的に考えられる「感嘆」や「感動」とは距離が遠い文脈においても頻繁に使用される。

以上あげたことを考慮すると、中期朝鮮語における「感動法」の「-ㅁ-/-ㅁ¹-」の意味・機能は、現代語の「-구나/-는구나」よりもはるかに広いものであると言えるので、「感動法」の用法を網羅的に整理することで、以上の問題点に対する説明を行うことができるとする。

そして、「感動法」の「-ㅁ-/-ㅁ¹-」の「核心的意味・機能」つまりは、一般的意味(general meaning)を、「気付き標識(깨달음 표시 : mirativity marker)」とする。mirativityとは、DeLancey(1997)以来、比較的最近になって類型論の分野において議論され始めた文法範疇であり、その核心は、「既存の知識ではない、その瞬間、その場所で新たに得た情報であること」を表す点にあるとする。

さらに、DeLancey(1997)以来、広く mirativity と証拠性(evidentiality)には密接な関係があることが論じられてきたと述べ、Aikhenvald(2004)が証拠性に関する議論において、「mirativity への拡張(mirative extension)」現象を述べたのに対比して、筆者は「感動法」の「-ㅁ-/-ㅁ¹-」が、「証拠性拡張(evidential extension)」を起こしていると考えられる。

かくして、「-ㅁ-/-ㅁ¹-」の意味・機能の研究の枠組みは、証拠性の研究の枠組みとほぼ同義になる。

ここで、証拠性という若干見慣れない用語について、説明を加えておく。例えば、Trask(1993)の evidential の項目を以下、紹介してみよう。

いくつかの言語に存在する文法範疇であり、それによって、すべての叙述文（そして時には他の文の諸タイプ）が顕在的かつ義務的にマークされて、話し手の発話の証拠の源(source)を示す。特に豊かな体系は、パプア諸語の Fasu 語の体系であるが、この言語においては、英語の文章である It's coming が以下のよう
に6つの異なった翻訳がなされる：

- apere 「私はそれを見る」
- perarakae 「私はそれを聞く」
- pesareapo 「私はほかの証拠からそれを推測する」
- pesapakae 「誰かがそう言ったが、それが誰か私は知らない」
- pesaripo 「誰かがそう言ったが、それが誰か私は知っている」
- pesapi 「私はそう思う(suppose)」

つまり、証拠性とは、話し手が行う発話の情報源に関する文法範疇であり、厳密な意味においてムード(mood)とは異なる文法範疇であると言うことができる。

一方、筆者は、証拠性の類型論的な体系に関して、Aikhenvald (2004:65)の表を参考にしたと思われる 박진호(2011)に依拠しつつ、以下のように整理している。

項の数	分化パターン				言語の例	
2項体系	直接証拠(direct evidence) 直接知識(first-hand knowledge)		間接証拠(indirect evidence) 間接知識(second-hand knowledge)		Balkan Caucasian Ob-Ugrian	
	個人的証拠(personal evidence)			meditated evidence	Lezgian Latvian	
6項体系	知覚/感覚経験 (perceptual/sensory experience)		③ 内省 introspection	推理/推論 (inference/reasoning)		⑥伝聞 hearsay Central Pomo Nambiquara
	① 視知 覚 visual	② その他の知 覚 non-visual		④推理 inference	⑤推論 reasoning	

そして、上の①から⑤に相当する用法が、中期朝鮮語の「-ㅁ-/-ㅁ¹-」が現れた文献に見られるとして、以下に示す個別的意味(particular meaning)を示している。

- ㉠ 内的感覚（上の表の③に相当）
- ㉡ 一致・識別・同定・評価
- ㉢ 知覚経験に随伴する気づき（上の表の①，②に相当）
- ㉣ 推理/推論と認識様態（上の表の④に相当）
- ㉤ 主観的・個人的感覚（上の表の⑤に相当）
- ㉥ 客観的・論理的導出（上の表の⑤に相当）
- ㉦ 理解・解釈・納得と内在化

そして、上に上げた個別的意味を表す中期朝鮮語における用例の詳細な分析を、71 ページから 151 ページまでにわたって行っているが、ここでは紙幅の関係上その紹介を割愛する。

次いで筆者は、上にあげた「時制標識」の「-ㄷ-」と「-ㅁ-/-ㅁ¹-」の結合順序に関して、この順序で結合した「-ㅁㄷ」が存在する一方で、結合順序が入れ替わった「-ㅁㄷ라」が存在する問題を論じる。

つまり、「-ㅁㄷ」と「-ㅁㄷ라」においては、形態素の結合順序自体がその意味の違いをもたらしており、前者は「過去の状況について現在のこの瞬間に気づいたこと」を表すのに対し、後者は「気づきが過去にあったこと」を表すとするのである。

「感動法」に関する最後の議論として、筆者は、「1 人称主語の感動法」に関して論じている。

これは 1 人称主語の文章の場合、「-ㅁ-/-ㅁ¹-」と「一人称」の先語末語尾「-ㅁ-」が共起可能かという問題であるが、これに対する解答は、「-ㅁ-/-ㅁ¹-」と「-ㅁ-」は本来統辞論的に排他的な「系列関係(paradigmatic relation)」にあり、意味論的にも排他的な関係にあるというものである。その関係性を示せば：

-ㅁ-	(なし)
-ㅁ-/-ㅁ ¹ -	-意図・統制・意識・意志(intention, control, awareness, volition)
-ㅁ-	+意図・統制・意識・意志

ここで指摘されるべきことは、これらが持つ、人称標識的性格であると、筆者は述べる。「-ㅁ-」が厳密な意味において 1 人称主語と一致(agreement)を行わないにもかかわらず、そのおおよその「傾向性」を重視して、これを一種の「1 人称標識」のように取り扱ってきたが、それと同様に、「-ㅁ-/-ㅁ¹-」について

も「3人称標識」のような性格と持つとする。そして、「-ㅂ-/-ㅂ¹-」は本来統辞論的に「1人称」の「-오-」と排他的に対立しつつ、典型的には主語が3人称である場合に多く現れ、もしも主語が1人称である場合には、自己を対象化・客観化しつつ、「あたかも3人称であるかのように」客観的にとらえていると述べる。

これは、現代朝鮮語において、おそらく証拠性を表していると思われる-더라が、典型的には1人称主語をとらないが、自己を対象化するような文脈においては、1人称主語が可能であることに類似しており、興味深い指摘である。

以上、第2の論点で述べられているように、「感動法」の「-ㅂ-/-ㅂ¹-」は、その実、証拠性を表すものであることがわかる。

最後に、第3の論点である、「感動法」の「-ㅂ-/-ㅂ¹-」に、先語末語尾の「-거-」が前接した形態である、「-것-」についての議論に移ろう。

この形態の体系は、以下のように示されている。

	感動法			1人称複数
	-ㅂ-/-ㅂ ¹ -다	-ㅂ-/-ㅂ ¹ -(으)니	-ㅂ-/-ㅂ ¹ -이다	-ㅂ-/-ㅂ ² -
-ㅁ-	도다	도스니>도소니	도스이다>도소이다	소
-더-	닷다	다스니	다스이다	다소
-느-	눗다	노스니>노소니	노스이다>노소이다	노소
-거-	것다	거스니	거스이다	과소

先語末語尾の「-거-」の意味・機能に関する問題は、中期朝鮮語における大問題であることはもちろんであるが、筆者は、本論文で「-거-」についての一般的な記述を行うことはしないとしつつも、「-것-」の用法の精密な理解と記述の目的のために、「-거-」についても最小限の議論を行うとしている。

そして、従来、「時相」的意味として「完了相」を表す「-거¹-」と、「叙法」的意味として「確信」などを表す「-거²-」の2種類があるとしてきた見解とは異なり、「-거-」の本質を「完了相(perfect)」標識としている。

ここから、「-거-」が含まれる、中期朝鮮語における「時相体系」を、「現代韓国語の“過去形”‘-았-’と関連する中世語の時相体系(動詞の場合)」として、以下のようにとらえている。

	時相(tense, aspect)	他動性(transitivity), 意図, 意識, 統制
-더-	過去非完望相(past imperfective) '-았었-', "回想法"	—
-φ-	過去完望相(past perfective) '-았-', "不定法", アオリスト(Aorist)	—
-거-	完了相(perfect) '-았-', "確認法"	主に自動詞, 形容詞と共起する自然発生的変化
-아-		主に他動詞と共起する人為的・能動的行為

ここで、過去と関連した形式が{past imperfective, past perfective, perfect}のように対立しているのは、古典ギリシア語の{未完了過去, アオリスト, 現在完了}や、ロマンス諸語に属するスペイン語の{線過去, 点過去, 現在完了}やフランス語の{半過去, 単純過去, 複合過去 (>口語的単純過去形)}と同様であり、体系的類似性を持っているとする。

そして、英語の現在パーフェクト (have+過去分詞) の用法との類似性が「-거-」(「-아-」)にあるとして、(1)近接過去, (2)結果状態の持続, (3)過去の持続, (4)過去の経験, を表す中期朝鮮語の用例をあげている。

以下, 190 ページから 241 ページにわたって, 「-거-」が含まれる「-것다」, 「-거시니」, 「-거시이다」の用例を綿密に検討し, それらの個別的意味を詳細に記述しているが, これも紙幅の関係上その紹介を割愛する。

その検討の過程で1つ注目すべきところをあげれば, 筆者は, 本来「時相的」に「完了相」を表示する「-거-」が「事態の成立」を表すという具体的な「時間的概念」から, 「前提の成立」を確認するという抽象的な「論理的概念」へと拡張して使用されることがあるとし, 高永根(1981)において, 「-거-」について命名された「確認法」という従来のも名称は, このような「事態や前提の成立」についての「確認」過程に注目した命名であると解釈することができると述べている。

第3の論点の中で最も注目されるのは, 従来モーダルな形態素とされてきた「-거-/아-」を, 「時相」の形態素とした点である。そのことにより, {-φ-, -ㅁ-, -더-, -거-/아-}という先語末語尾の対立は, すべて「時相」の対立ということになるが, この見解は非常に新鮮であり, 中期朝鮮語の「時相」研究に新たな地平を切り開いたものとして評価される。

以上, 本論文の3つの主な論点を紹介してきた。それぞれの論点を展開するにあたっては, 中期朝鮮語の言語事実に立脚するとともに, 類型論的背景を持つ言語理論を導入しており, 非常に説得力のあるものとなっている。本論文が中期

朝鮮語の文法研究に対して大きな貢献をするであろうと考えてよいと思われる。
ただ、課題を言わせていただくと、文法理論の面で若干物足りない点がみられる。

1つは、「-ㅁ-/ㅁ-」の意味・機能に対して、証拠性という観点から接近を試みているが、証拠性の意味領域に関して、Aikhenvald (2004)を援用したと思われる박진호(2011)の枠組みにそのまま無批判に従っているという点である。evidentialityを持つ言語に関する研究は、管見の限り Chafe and Nichols(1986)以来最近に至るまで盛ん行われており、それらの研究成果を筆者が本論文に十分に反映させることができたかについて、疑問が残る。

もう1つは、「時相」の先語末語尾に関する理解の問題である。「過去非完望相(past imperfective)とされ、現代朝鮮語の「-았었-」に相当するとされた「-더-」と、「過去完望相(past perfective)とされ、現代朝鮮語の「-았-」に相当するとされた「-ㅁ-」の対立は、果たしてこれでよいのかという点である。評者の理解では、past imperfectiveとして現代朝鮮語で機能しているのは、「-고 있었-」である。現代朝鮮語の「-았었-」をpast imperfectiveとする理論的根拠はいったいどこにあるのだろうか。スラブ語研究に立脚した一般アスペクト論に対する研究を行っていくことが筆者の今後の課題であろう。

以上あげた課題を考慮しても、本論文の価値は十分に認められる。筆者の今後の研究の発展を大いに期待したい。

【参考文献】

- 高永根(1980)「中世語의 樣態・情感의 敘法에 대한 研究」『人文論叢』5, 서울 大學校 人文學研究所
- 高永根(1981)『中世國語의 時相과 敘法』답출판사
- 박진호(2011)「韓國語에서 證據性이나 意外性의 의미성분을 포함하는 문법요소」『언어와 정보 사회』15
- Aikhenvald, A. Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford:Oxford University Press.
- Chafe, W. L. and Nichols, J. (eds.) (1986) *Evidentiality:The Linguistic Code of Epistemology*. Norwood, NJ: Alvex.
- DeLancey, S. (1997) "Mirativity:The Grammatical Marking of Unexpected Information", *Linguistic Typology* 1.
- Trask, R. L. (1993) *A Dictionary of Grammatical Terms in Linguistics*. London:Routledge.
- (浜之上幸・評)